

韓国の国史科教科書にみる日本史(3)

清 田 善 樹

A Consideration of History Textbooks in Korea (3)

Yosiki Kiyota

Summary

In this paper, I investigated the textbooks of history used in Korean junior highschool, and analyzed description about Japan. The results which I could acquired through analyses on school textbooks in Korea are as following.

1. In description on Koryo (高麗) age, they are no interested in political, economic, diplomatic and cultural relations between Japan and Korea.
2. They consider Medieval Japan as a base of Wakou (Wai ku, 倭寇).
3. They take importance in "Im Jin Wai Ran" (壬申倭乱) which was the war caused by Toyotomi Hideyosi's (豊臣秀吉) aggression. So they spend many pages in order to describe the process of war and the action of partisan (Wi peon, 義兵) which were organized by peasants, priests and confucianists.
4. They indeed stress the Japanese brutal acts, but also refer to peaceful relations in Tokugawa (徳川) age. The diplomatic relations between Japan and Korea in near modern age is described more fully than that of school textbooks in Japan has done.

Received Jan. 19, 1990

Key word : Korea, Historical Schoolbook.

第 1 章 中学校『国史』(上)

第 1 節 体 裁 と 構 成

第 2 節 先 史 時 代

第 3 節 古 代 (二)

第 4 節 古 代 (二)

第 5 節 中 世

1 高麗時代（前期）

「IV 高麗時代の生活」の構成は次の如くである。

1. 高麗の成立
2. 高麗前期の対外関係
3. 高麗前期の社会と文化
4. 貴族社会の動揺
5. 高麗後期の対外抗戦
6. 高麗後期の社会と文化

「1. 高麗の成立」では、統一新羅時代末期における新羅、後高句麗、後百済のいわゆる後三国の成立と高麗の建国について述べている。つづく「2. 高麗前期の対外関係」においては、日本に関係した記述はみられないが、当時高麗がおかれていた国際関係は日本にとってもまったく関わりがないというわけではないので、簡単にみておきたい。

高麗前期の対外関係としては、対契丹および対宋との交渉があげられる。このうち契丹との関係は、高麗が高句麗を継承したという意識をもって北進政策をとったため、絶えず緊張したものであった。

太祖は国を起こした後、契丹と強硬に対立しつつ、昔の高句麗の地の回復のために北進政策を採用した。特に太祖は、契丹が渤海を滅ぼした国で、文化的に野蛮な国だと考えて、子孫にも契丹とは関係を結ばせなかった。そうして高麗は、契丹とはまったく交渉を持とうとはしなかった。したがって、高麗のこのような政策は、自然と彼らとの衝突をもたらした（P82）。

高麗に対する契丹の侵攻は三度あった。993年、契丹が鴨緑江を渡河した時は、徐熙の巧みな外交活動によって、高麗は領土を失うことなく、逆に鴨緑江東方の江東六州を手に入れた。しかし、1010年、再び侵入してきた契丹軍は首都開京を陥落させ、高麗が契丹に入朝するという高麗にとってははなはだ不本意な条件で和議がなった。さらに、1018年には、十万の契丹軍が三回目の侵入を企てたが、姜邯賛が率いる高麗軍は亀州で勝利してこれを阻止した。これ以降は、両者の間で戦闘は行われなかったが、高麗は北方への防備を厳しく固めたのであった。

以上のように、高麗朝の前期においては、北方の契丹の侵略とそれに対する抗戦防備が対外関係上の最重要課題であったのである。したがって、日本との関係については教科書の記述の中でもまったく関心が払われていない。「貿易と碧瀾渡」においても、中国の宋との貿易については、輸出品や輸入品について詳しく述べられ、さらに、アラビア商人が水銀・香料・薬品などを伝え、また彼らアラビア商人によって高麗（Korea）の名前が西方世界にまで知られるようになったことが記されているが、日本については言及するところがまったくない。

契丹との抗争の次には、女真族との抗争が起こった。女真族は、元来満洲と高麗の東北国境地帯に住んでいた。高麗側に言わせると、彼ら女真族は高麗を父母の国として敬い朝貢してきたが、12世紀初頭に完顔部を中心にまとまり、高麗までも勢力を伸ばしてきた。これに対して、高麗は別武班と名付ける軍隊を組織して尹璫等に命じて女真族の掃討を行ったが、最終的には拡大した領土に築いた東

北9城をその防衛が困難であるという理由によって女真族に返還してしまった。このことからわかるように、高麗はもともと女真族に対して、絶対的に有利な立場にあったわけではなかったようであるが、女真族の阿骨打が契丹を撃ち破って金を建てると、高麗と女真族の立場は逆転してしまったのである。教科書はこのところを「これに対して高麗では反対する人々が多かったが、平和関係を維持するために終止彼らの要求を受け入れた。しかしこのような外交政策は、国の困難を予め防ごうとした一時的な方便であって、国民はこれを克服して、自主性と民族守護の確固たる姿勢を捨てなかった」(P86)と記述している。このように、高麗前期においては、対契丹並びに対女真族との抗戦を主とした対外関係に記述の重点がおかれている。

2 高麗時代(後期)

モンゴル⁽¹⁾が中国やその周辺諸国に対して侵略の手をひろげだすと、高麗は粘り強く長期にわたって抵抗を試みたが、結局はその支配下に組み込まれてしまった。そうして、国号を元と改めたモンゴルは、高麗にも協力することを強要して、日本遠征を断行するのである。したがって、ここでは、日本に関連することとしては、元に強要されて日本遠征に加わったという事実のみが語られ、その時点における日本の様子(例えば武士政権の成立など)や、日本、高麗、元、宋などの国々の間の外交通商関係の歴史などに関する記述はない。

しかし、モンゴルが高麗全土を蹂躪したにもかかわらず、これに対して高麗人民が果敢に抵抗したことが、結果的に元の日本遠征を遅らせることになったわけであるし、また三度目の日本遠征を断念させる原因にもなったのであるから、日本にとっては、この間における高麗の対モンゴル抗戦が決して見過ごすことのできない大事な問題であるといえることができる⁽²⁾。以下、高麗とモンゴルとの関係をみていく。

高麗と蒙古との接触 崔氏武臣政権が確立されていくころ、蒙古ではテムジンが国を建て、自らチンギス汗と称して、南宋と金にまでその勢力を伸ばした。そうして、満洲に住んでいた契丹の遺族たちは蒙古の圧力を受けるようになり高麗に押し寄せてきたが、金就礪將軍に追い出された。

その後契丹族は再び押し寄せてきたが、高麗の反撃をうけて江東城に雄居するようになった。このとき、高麗は蒙古軍と共に江東城の契丹族を掃討したが、これによって高麗と蒙古は初めて接触するようになった。

その後、蒙古は契丹族を討伐したことを口実に、高麗に多くものを要求するなど圧力を加えてきたので、両国の関係は悪化した。

蒙古に対する抗争 高麗と蒙古の関係が悪化した間に、蒙古の使臣が高麗にきて帰途に鴨緑江の近くで殺される事件が起こった。早くから高麗を討つ機会を狙っていた蒙古は、この事件を高麗の所行であるといってサツリタを送って大々的に侵入した。

蒙古は、高宗18年(1231)に義州を経下って来て開京を包囲したが、前もって戦争の準備をしていなかった高麗は和平を掲げて敵を送り返した。そこで蒙古は、地方の監視にタルガチを残しておいて引き上げていった。

その後、蒙古が無理な朝貢を要求してくるや、高麗は最後まで蒙古と戦う決心をして、翌年首都を江華島へ移し、徹底した抗戦体制をとった。

屈強の軍事力を持った蒙古の侵入を再び受けるようになり、高麗は大きな危機を迎えた。しかし、あらゆる困難を押し切って抗戦した。また、仏の力を祈ってこの困難を克服しようと大蔵経刊行を計画し、高麗大蔵経版を彫りもした。

崔氏政権も強く抗戦したが、民衆の果敢な闘戦は実に驚くに値した。特に、社会的に卑しめられていた奴婢と賤民たちまでが果敢に戦い、忠州などの諸処で輝かしい功を立てたことも非常に注目に値する。

戦争が長期化すると、蒙古は武力で高麗を征服することが難しいことを知り、陸地に出てきて講和することを高麗に要求した。

このような間に江華島で政変がおき、60年続いた崔氏政権が倒れた。崔氏政権が倒れると、蒙古との和解が成立して、とうとう長い戦争は終わった。

蒙古との戦争で高麗は大きな被害を受けた。国土は荒廃して数多くの百姓が生命を失い、また慶州皇龍寺の九重塔と大邱符仁寺に保管されていた大蔵経版など貴重な文化財が焼失した。(P 103-105)

このように、高麗は、大きな犠牲を払いながらも果敢な対モンゴル抵抗戦を続けたのであるが、最後にはモンゴルの軍門に降らざるをえなかったのであった。しかし、国王が江華島を出て開京に還都しても、これまで対モンゴル戦争において最も勇敢に戦ってきた三別抄は、政府の方針に従わず反旗を翻して、蒙古に対する抗戦をやめなかったのである。彼らは、珍島と済州島に依って4年間にわたる頑強な抵抗戦をくりひろげたのち、麗蒙連合軍によって鎮圧されたのである。三別抄が政府の方針に反して対モンゴル抵抗戦を始めたのが西暦1270年のことであり、鎮圧されたのがその4年後であることは、元の二度にわたる日本遠征のうち、第一回の文永の役が西暦1274年であったこととを見るとき、彼ら三別抄の行動が、元の対日遠征計画の実行に大きな支障を与えたであろうことは想像するに難くない。

さて、元の日本遠征の計画には、当然のことながら、高麗も巻き込まれた。すなわち、高麗の地理的位置は、日本遠征の際の兵站基地としてはまさに最適であったし、日麗両国の間の長い歴史的関係から、日本に対する交渉役としても高麗は元の意を受けて働かざるをえなかったのである。元の日本遠征は、高麗にとっては大きな災いであったとしか言い様がない。なぜなら、日本遠征のために元は征東行省を設置して高麗に臨み、艦船の建造や兵員の動員を要求するなど、経済的軍事的に過酷な要求を行ったからである。高麗は元の要求によって、何度も元使を案内して日本まで宣撫の使者を送らねばならなかったのである。

しかし、教科書には、次のように記されていて、日本遠征に先立つ日麗間の交渉などについては言及されていない。

蒙古族が建てた元は、三別抄の抗争が終わった後、高麗に対していろいろな圧力を加え始めた。元は、彼らの日本遠征に高麗が協力することを強要した。二度に及ぶ元の日本遠征は台風で皆こと

ごとく失敗したが、この遠征によって高麗が被った経済的軍事的損失は莫大であった。元は日本遠征のために征東行省という官庁をおいて、漸次高麗の内政に干渉した。そうして、高麗の官制が改編されて、公式用語も多く変わった。(P105)

それでは、日本の教科書では、このところはどの様に記述されているのであろうか。

1268年、高麗(朝鮮)の使者が、元(モンゴル)の皇帝の手紙をもって九州の太宰府にきた。手紙は日本の服属を求めるものであった。

元は、モンゴル高原で遊牧生活を送っていたモンゴル民族が、中国北部を支配して建てた国で、根強く抵抗する高麗も30年近くかかってしたがえた。そして、日本もしたがえようとしたのである。

高麗では国王が元にしたがうと、高麗軍の一部が反乱をおこし、民衆の支持をえて元軍と戦った。そのため元の日本遠征はおくれた⁽³⁾。

というように、高麗の抵抗と日本遠征の関わりについて述べている。韓国側は、自国の軍民の対モンゴル抵抗戦が、元の日本遠征計画にどのような影響を与えたのかについては言及していないが、意図的ではなかったにせよ結果的には日本に有利な条件を与えることになった点について、三別抄の行動に対する評価に付け加えてもよいように思われるのである。少なくともわれわれ日本人としては、隣国の人民による抵抗運動に負うところ大であることを忘れるべきではないし、日本の教科書も最低限の言及はしているといえよう。なお、高麗の官民共に元に対して強く抵抗したことについては、「高麗の抵抗」という見出しを設けて高麗の抵抗運動を紹介したり、「日本侵略の中止」として「元は、3度目の日本侵略をくわだてましたが、中国・朝鮮・ベトナム・ジャワの民衆の抵抗や、モンゴル帝国内の反乱のため延期され、クビライの死により中止されました」⁽⁴⁾と述べていて、高麗のみに限定せず、東アジア諸国の人民たちによる反元抵抗運動にも触れているものがあることを付記しておく。

なお、韓国で発行された日本の通史の中、たまたま目にしたものにおいては、元寇について日本の高等学校の日本史の教科書程度の詳しさを説明しているが、記述の視点は日本側に設定されていて、特に元寇と高麗の関わりについては述べていない⁽⁵⁾。日本で出版された通史や研究論文におおきく依拠した事がそのような記述の仕方になる原因であると考えられる。

14世紀になり、元が新たに興った明によって北方に逐われると、高麗の恭愍王は排元政策を取って自主権を取り戻す改革運動を繰り広げた。しかし、辛旽の専横と権門勢家たちの反対によって、改革運動は失敗に終わってしまった。恭愍王の改革に支障をきたしたのは、国内の問題だけではなくて、北方の紅巾の賊と南方の倭寇の侵入であった。

高麗が改革運動を展開していた頃、北方の紅巾賊と南方の倭寇が高麗に侵入して、改革運動に大きな支障を与えた。

紅巾賊は元の支配に反対して起こった漢族の群れで、主として中国の北方地方で抵抗運動を展開してきたが、元に追われて二度も高麗に侵入した。紅巾賊の侵入で、一時開京が陥落させられもしたが、鄭世雲・李芳実・李成桂等が紅巾賊を追い払った。一方、高宗の代から三南地方の海岸を襲い略奪していた倭寇は、恭愍王以後には海岸から遠い内陸地にまで奥深く侵入してきて騒乱を起こした。

倭寇の侵入で海岸地帯の農地は荒廃し、租税の貢上運搬が困難になると、政府は武力で支配する方法も取りながら、一方では日本政府に倭寇の徹底した取締りを要求した。

崔瑩・李成桂等は陸地で何度も倭寇を撃破し、崔茂宣は火筒都監を設置して新しく作った火砲をもって海で倭寇を大いに撃ち破った。昌王の代に、朴葦が倭寇の巢窟である対馬島を征伐すると、倭寇の勢力は漸次弱まった。(P108)

このように、元末から高麗は倭寇の跳梁に悩まされることとなったのであるが、ここで気になる事を一つ指摘しておく、倭寇とは一体何物でであるのかという事についてまったく説明がないという問題である。というのは、一つには倭寇と呼ばれていた者達の正体が、必ずしも日本人に限定されるものではないらしいことが近年明らかになってきているからであるが⁽⁶⁾、もう一つには、韓国の国史科の教科書で用いられている「倭寇」という用語がきわめて曖昧であるからである。おそらくは、日本からの侵攻を「倭寇」と総称しているのものであると思われるけれども、歴史性を考慮しているようには見えないのである。例えば、前回に触れた古代の「統一新羅の発展」⁽⁷⁾の項で、大王岩の写真に付された説明には「文武王の海中陵である。倭寇を阻止して、国を守護せんという文武王の遺言にしたがい海に葬った。」と書かれているが、ここで云う「倭寇」とは、当時緊張した関係にあった日本と新羅との関係から見て、高麗時代や朝鮮時代初期における倭寇の用法すなわち日本人による海賊的行為という意味ではないと考えるべきであろう⁽⁸⁾。新羅や高麗にとってみれば、日本から侵略を受けるという点では変わりないと言えるのかもしれないが、新羅時代においては、日本という国家による侵略を意味していたのではなかろうか。それに対して、高麗王朝を苦しめた「倭寇」は、このような日本国としての公的な行為でなく、あくまでも私的な行為と言うべきものである。そうであるからこそ、高麗は日本に対して戦争を望まないで倭寇の「巢窟」であるとみなされた対馬を襲撃するにとどめたのではないか。倭寇に襲われた方の気持ちとしては、そのようなことにこだわるよりも被害を強調したくなるのかも知れないが、13・4世紀における「倭寇」についてはいかなる原因で生じたものであるのかについてももう少し配慮を望みたく思う。前近代における日本関係史の記述方針が、「侵略者日本」というところにある事については、これまでも見てきたが、その様な記述の基本的方針が、かかる歴史性を軽視するかのごとき「倭寇」という用語の使い方に反映しているのであらうと考えられる。

倭寇について、日本の教科書ではどの様に記述されているであらうか。大阪書籍発行のものでは「元から明へ」という項で

日本では、南北朝のころから、北九州の島島やと瀬戸内の武士や漁民らが、朝鮮・中国との貿易を行いときには海賊となったので、倭寇といっておそれられていました⁽⁹⁾。

と述べている。また、日本書籍発行の教科書では、「倭寇と日韓・日中貿易」の項で

九州の人々による朝鮮との貿易は、元寇の頃にとだえた。南北朝内乱の頃、九州などの武士・商人。農漁民のなかには、多くの船で隊を組み、朝鮮へ出かけるものがあつた。彼らは無理に貿易を求め、さらには町や村をおそって、穀物や人間をうばい取つた。これを倭寇という。倭寇は中国の沿岸もおそうようになった⁽¹⁰⁾。

という説明をしている。

さらに、中教出版の教科書では、

日本と中国との国交は、元寇の後、絶えていた。しかし、貿易はさかんで、商人や僧侶はゆききしていた。

一方鎌倉時代の末から、九州北部や瀬戸内海沿岸の武士や漁民の中には、集団で中国大陆や朝鮮半島の沿岸に進出して、貿易をおこなうものがいた。しかし、貿易の交渉がまとまらないうと、海賊となってあらしまわるものもいて、中国や朝鮮では、これを倭寇とよんでおそれていた⁽¹¹⁾。

以上の三種類の教科書が記すところによれば、倭寇とは、本来九州北部や瀬戸内海沿岸の武士や農漁民が交易のために中国や朝鮮に赴いたものであって、それが事情によっては海賊化したものであったということになる。

交易が、正式の国交関係とは別に行われていたという中教出版版教科書の記述は、倭寇の背景事情の説明として大事なことであると思われる。しかし、「多くの船で隊を組み」あるいは「集団で中国大陆や朝鮮半島に進出し」て「穀物や人間をうばい取った」行為は、倭寇の起こった原因を単純に交易にだけ求めるべきではないことを示唆している。韓国側では、倭寇が海岸地帯から遠く離れた内陸にまで入り込んできて騒乱を起こしたことと、倭寇の侵入によって農地が荒廃したことを述べるのみで、倭寇のよる被害の実態については具体的に述べていない。また、高麗と日本との正式な国交がない状態での貿易についても触れるところがない。したがって、このところでは、韓国の教科書は、日本と高麗との関係については、倭寇の侵入以外にはまったく関心がないようである。しかし、倭寇がただ単に財物を奪っただけでなく、高麗人を拉致してきたというならば、当然その理由や目的とを明記しておかねばならないと思う。日本の教科書では、朝鮮や中国の人々が倭寇を甚だ「恐れた」ことを記す。しかし「恐れ」させたまま放置しておいては、われわれ日本人も結局のところ倭寇について無理解のまま終わるのではなかろうか。日本のどのような歴史的條件が倭寇を生み出すことになったのか、中学校の段階ではあっても、多少は考慮するようにしていくべきではなかろうか。

以上に述べたごとく、中世すなわち高麗時代においては、日本に関する記述は極めて少ないし、またごく狭い範囲に限られている。しかし、当該時代は、表面的には日本は鎖国を行っていたように見えても、決して海外諸国と完全な没交渉であったのではなく、商人の往来もあったし、日本語を解する高麗人が中国で日本人と出会ったこともあったのである⁽¹²⁾。したがって、もう少し視野を広げて見るなら、この時期における国際関係の説明のあり方には、日韓両国はともにいまだ少し工夫があつてしかるべきであろう。

ともあれ、教科書の記述の中の高麗時代における日本像は、沿岸部のみならず内陸部にまで侵入してきて略奪を行う恐るべき倭寇の本拠地であつて、日本からみれば、一面的な見方であると言わざるを得ない。しかし古代の記述の検討の中でも指摘しておいたように、このような記述がなされる歴史的背景を考えるなら、現時点ではいたしかたない事であるのかもしれない。もし、韓国側に教科書の記述の改善を申し入れる機会があつたとしても、それに先だつてまず日本における歴史教科書のありかたを正しておかなければ、説得力を持ち得ないであろう。

第六節 近 世

国史科の教科書の上巻は「V 朝鮮の発展」で終わる。以下に目次を記す。

1. 朝鮮の成立と発展
2. 経済生活
3. 民族文化の隆盛
4. 兩班社会の変遷
5. 外侵の克服

1 李氏朝鮮の成立

高等学校用の国史科の教科書では、李朝時代は近世として時代区分されている。李氏朝鮮が成立するのは1392年のことであるが、偶然にもこの年はわが国ではちょうど南北朝の内乱が終わって兩朝が一本化した年であった。

この時期に関する「学習概要」には、

高麗の後をついでわが国を500余年間導いて行ったのは朝鮮であった。今日のわれわれの生活も、大部分はこの時代の歴史遺産の上に展開されている。

14世紀の末、内外に危機を迎えた我が歴史に新たな転換をもたらしたのは、朝鮮の建国であった。朝鮮は、儒教を掲げて王権を固め、民政の安定に力を尽くして活発な国家活動を展開した。

建国後一世紀の間にわたる努力で、朝鮮は儒教中心、兩班中心の中央集権的な国家組織を固め、外部へ積極的な事大交隣政策を展開して、国際平和に努力した。

朝鮮は、政治的發展と社会的安定を元にして活発な民族文化活動を繰り広げ、民族文化の全盛を成し遂げた。(P123)

というように、李朝時代に対して極めて積極的かつ肯定的な評価が下されている。高麗時代の旧貴族勢力の経済的基盤を切り崩すための土地制度である科田法、経国大典などの法典の整備、義政府や六曹等の行政組織、郡と守令のような地方行政組織等についてかなり詳しく語られている。また、軍事組織、科挙の制度についても詳細な説明がなされている。

日本に関する記載は「初期の対外関係」に見られる。

朝鮮は、内に国の大本を正す一方、外には近くの間との平和に力を尽くした。そして、必要に応じては、実力でわが国土を拡張する政策を展開して進出もした。

明に対しては、名分を生かしてやりながら、使臣の往来を通して、経済的・文化的実利をとった外交活動を行った。太祖の代には、わが国が遼東地方を取り返す努力を継続したため、明との間がよくなかったが、太宗以後には親善関係が維持され、明が滅びるときまで継続された。国初に明と平和的親善関係を結ぶことによって、国内のことに積極的になれたのみならず、政治と文化を發展させる助けになった。

一方、日本と女真に対しては、強硬と懐柔の両面政策を展開した。

日本は、当時内乱が継続して国内がひどく混乱していたが、その間に我が海岸を侵し略奪する倭

寇達が絶えなかった。

世宗の代には、倭寇の根拠地たる対馬島を征伐する一方、彼らの請いをいれて、日本人が出入りして通商することができる三浦（齊浦・釜山浦・塩浦）を開港してやった。その後、三浦に日本人が住み着くようになり、彼らによる被害が生じると、彼らの貿易活動を制限する新たな約定を結んだ。（P135, 136）

このように、日本に対して朝鮮は、倭寇対策という観点から、釜山浦における対日貿易を許可したとされている。したがって、貿易そのものは極めて消極的なものにならざるをえず、貿易活動を制限する条約が結ばれたわけである。日本で云う応永の外寇や、あるいは三浦の乱など、両国の関係にとって否定的な面のみが語られているのもそうした理由によるのであろう。

しかし、高麗時代末から李朝時代のはじめにかけては、確かに倭寇など日朝間の国交の妨げとなる要因が存在したが、日本側にすれば貿易はそれ以上に大事なものと考えられていた。日本では、高麗版の大蔵経は珍重されたし、木綿はうち続く戦乱の世においては兵士の衣料として無くてはならぬものであった。韓国側では、この時期における両国間の貿易自体にはさしたる関心はなく、貿易品目についてはまったく言及していない。

日本の教科書ではどの様に記述されているであろうか。日本書籍版では、室町幕府と明との間で行われた勘合貿易について述べた後、ポイントを一つ落とした小さな活字で「朝鮮との間では、毎年多くの人が往復したが、明との勘合貿易は十年に一回であった。朝鮮からは綿布や仏教の經典を、明からは銅銭や生糸・磁器を輸入し、日本からは銅・硫黄を輸出した」⁽¹³⁾と述べている。また、中教出版版も「朝鮮と琉球」という見出しのもとに「朝鮮半島では、倭寇を撃退して戦功をあげた將軍の李成桂が、高麗をたおして、1392年、朝鮮（李氏朝鮮）を建てた。この朝鮮では、朱子学が広まり、活字印刷がさかんになった。朝鮮もまた、倭寇の禁止を求めてきたので、正式な貿易が開かれ、対馬の宗氏をなかだちとして、日本は木綿などを輸入し、銅や染料などを輸出した」⁽¹⁴⁾としていて、貿易品目まで説明したものが多いうのである。

日本の教科書は、もちろん倭寇についても触れているが、貿易そのもの、特に朝鮮からの木綿の輸入に関心が高く、日韓貿易史として記述しているといえよう。対するに、韓国の教科書においては、倭寇による暴行略奪に主たる関心が存し、日朝貿易については生徒に対してそう多くは教える必要が無いものと考えているように見受けられるのである。古代史においては、主に文化面における交流あるいは文化の伝播が日本と朝鮮三国の特筆すべき事項とされていたが、中世あるいは近世初期においては、倭寇の海賊的行為がその位置を占め、民族の苦難とその克服の例の一つとされているのである。前近代におけるこのような日本観は、次の豊臣秀吉による朝鮮侵略で頂点に達する。

2 壬辰倭乱・丁酉再乱（文禄・慶長の役）

高麗時代には元の大軍に国土を蹂躪されたが、李朝時代には、日本と女真族の侵略を短い期間に南北から受けることとなった。この二つの戦乱を「5. 外侵の克服」で扱っている。なお、高等学校用の教科書では、日本と女真族の侵入を「倭乱と胡乱」と表現している。

「外侵の克服」の「学習概要」は、次のように二つの国難をまとめている。

朝鮮は、国初から、日本に対して平和に通商の道を開いてやった。しかし、日本人達は、貿易活動に対する制限に不平を抱き、海岸地帯でしばしば騒ぎを起こした。日本は、長期間の内乱が豊臣秀吉によって統一されると、朝鮮に対して無謀な戦争を起こした。7年間にわたる壬辰・丁酉の倭乱で、わが国は大きな苦難を経験した。

国難を被った同胞は、侵略に対抗して戦った。各地で起こった義兵と、再び編成された官軍、そして水軍の勇戦で、とうとう倭侵を克服した。

しかし倭乱の傷が未だ癒える前に、満洲の新たな支配者として登場した女真族の侵略を二回も受けた。南と北からの外勢の侵略で、わが国はとても大きな被害を被った。のみならず、その傷は長らく我が社会に残った。(P172)

秀吉による朝鮮出兵とそれに対する官民あげての民族的抗戦及其影響などについては、それぞれ「壬辰倭乱」「民族の抗戦」「丁酉再乱」「倭乱の影響」という見出しを立てて詳しく記述されている。倭乱関係の記載は、原本では6ページにわたっていることから、韓国政府ないしは文教関係者がどれほどこの問題を重要視しているかが知られよう。ちなみに、日本の教科書はこれまでに例示した三種類とも、1ページが秀吉の朝鮮侵略の説明に充てられているに過ぎない。日本の教科書が「国史科」の教科書ではなく、「社会科」の中の歴史分野の教科書であって東洋史と西洋史なども含む世界史の教科書であることを考慮しても、その差は歴然たるものである。次に、少々長くなるが、倭乱関係の記述をみていくこととする。

壬辰倭乱 国初に日本人が貿易できるように三浦を開港してやった。しかし、だんだんそこに日本人居住者が生じたり、弊害が起こるようになるや、彼らの貿易活動を制限する癸亥条約を結んだ。このような制限に不満を抱いた日本人達が、時に三浦で乱を起こして、南海岸を掠奪することかしばしばあった。

このような日本人達のたびかさなる動乱で、とうとうわが国は日本との外交関係をたってしまった。

日本は15世紀中葉から長い間内乱に苦しめられていた。百余年間の内乱を統一して実権を握った人物は豊臣秀吉であった。彼は、自分に対する不平勢力の関心を国外にそらせて、同時に自分の侵略的野心を展開させるために、明にゆく道を借りるというとんでもない口実を掲げてわが国に攻め込んできた(1592)。日本は、内乱期を経験して鍛練された武芸と新たに導入した鳥銃でもって、弓と刀槍で対抗したわが国に侵略を敢行した。その間くりかえされた党争で混乱していたわが国は、早くから倭国の野心を感じとって国防を固めなければいけないという李珥の主張すら退けて国防をなおざりにしてきたので、不意の国難を味あわされた。

倭軍の侵略をうけるや、釜山と東萊で鄭瑢・宋象賢らが力の限り戦ったが、これを退けられなかった。忠州の防御線も崩れ、とうとう首都が敵軍の手中に入り、敵の先鋒部隊は平安道と咸鏡道にまで至った。(P173-174)

上記のように、日本が長らく戦乱の世にあったこと、それを鎮めて統一政権を打ち立てたのが豊臣

秀吉であったことなど、当時の日本の状況を簡単に説明し、その上で秀吉の朝鮮侵略の理由として、日本国内の秀吉に対する不満を持つもの達の関心を国外にそらせようとしたことと、秀吉自身の領土的野心に求めている。明征服のために朝鮮に道案内を求めた、あるいは明へ行くための道を借りようとしたと言ういわゆる「仮道入明」は、秀吉の朝鮮侵略においては単なる口実に過ぎないとされているのである。秀吉の朝鮮侵略について、日本の教科書はおおむね「仮道入明」説に立って記述されており、豊臣政権自体の基盤の弱さに起因する諸大名統制の問題には全く言及されることなく、領土拡張の強い野心を持っていた秀吉の個性にその原因が帰されている。例えば、日本書籍版では次のように云う。

秀吉の朝鮮侵略　自分の威光を海外にまで示そうと考えていた秀吉は、国内統一をなしとげると明を征服しようとした。そのため秀吉は1592年、諸大名の軍勢15万人あまりを朝鮮に侵入させ、まもなく漢城（今のソウル）などを占領し、明の国境近くまで攻めこんだ。

このような秀吉の領土拡張願望説は、

ところが、統一が進むと、インド・フィリピン・台湾などにみつぎ物を要求するなど、強い態度でのぞむようになった。

さらに、秀吉は、明を征服しようと、朝鮮に案内を求めたが応じなかったので、2度にわたって大軍を送り朝鮮や明の軍と戦った（文禄の役、慶長の役）⁽¹⁵⁾。

とか、あるいは

秀吉は国内を統一すると、海外にも勢いをのばそうとし、フィリピン・台湾に手紙を送り、日本に服従して通商するよう求めました。さらに明を征服しようとし、朝鮮に日本への服従と日本軍の通行を申し入れましたが、それが拒否されると、1592年、九州の大名を主力とする大軍を送りました⁽¹⁶⁾。

というように、各社の教科書に共通してみられる。

秀吉の対外政策は、インドやフィリピンに対する強圧的態度や短期間のうちに朝鮮の北部にまで進撃した日本軍の戦果を見る限りでは、「国威を発揚」するものとして評価されるのかもしれない。しかし、日本の教科書は、そのような立場に立って文禄・慶長の役の歴史的評価を下しているわけではないようである。それは、「朝鮮侵略」「秀吉の朝鮮侵略」といった見出しを立てていて、「朝鮮征伐」とは云っていないことを見ても明かである。

そうであるならば、「朝鮮に案内を求めたが応じなかったので」などと非が一方的に朝鮮側にのみ存するような、それこそ韓国の教科書がいうような「とんでもない口実」を正当化する書き方は再考せねばならないのではなかろうか。少なくとも、今日の学界における研究水準は「仮道入明」的なものよりはるかに深められているはずである。

日本軍は長い戦国時代間に十分に訓練されていたし、また新兵器である鉄砲を装備していたので、またたく間に半島の北部まで進撃した。対する朝鮮側は、不意を突かれたこともあるが、また国内の問題もあって、当初は有効な反撃ができなかった。しかし、官軍がもたついているうちに、僧侶や一般民衆が抗戦に立ち上がり、大いに日本軍を苦しめた。その間の事情を次のように述べている。

民族の抗戦 危機に直面したわが民族は、押されながらも臆せず力強く持続的な抗戦を展開した。

侵略軍の行く手が北方にまで及ぶや、李舜臣が率いる我が水軍は亀甲船を先に立てて玉浦、泗川、唐項浦、閑山島前面の海上など諸処で倭の水軍を撃ち破り、侵略する倭軍と日本との連絡路を遮断する一方、西海に侵犯しようとする倭軍の野心をくじき、湖南地方の軍糧と国民を確保するようにした。

一方、倭軍が占領していた後方各地では、儒生と高僧たちが国の危機を救わんとして義兵を起こすと、民衆もこれに荷担して武器を持って戦った。

義兵は国家の危機を傍観することができず、進んで命をかけて戦った義勇軍であった。彼らは各地で倭軍を奇襲して占領地を攪乱するなど、倭軍に大きな打撃を与えた。

義兵活動は慶尚道で郭再祐によって始められた。趙憲は僧兵將靈圭と700義士を率いて、押し寄せる倭敵と戦って錦山で戦死した。この他にも各地で義兵部隊が活躍をして、僧兵たちもめざましい活躍をした。

一方、散らばっていた官軍も、義兵部隊と連絡をとりながら反撃にでた。金時敏は晋州城をついに守り通し、権慄は敵軍の全羅道侵略を挫折させ、その後北上して辛州で大きな勝利を収めた。

初期の戦いと異なり、明軍の援助と我が民族の多角的な抗争で戦局が日に日に倭軍に不利になると、これにうろたえた倭軍は明の講和提案にかこつけて南海岸に押し出された。

丁酉再乱 3年に及ぶ和議交渉が決裂すると、倭軍がまた北進を開始したが、これを丁酉再乱という。

しかしこの時には、我が官軍と義兵も準備を整えていたし、また、明の援兵も所々に進駐していて、倭軍を防ぐことができた。ただ、倭の水軍は、彼らの離間策で一時李舜臣が退いた隙を利用して我が水軍を撃破して氣勢をあげもした。しかし、再び李舜臣が起用され、秀でた作戦で鳴嶺で倭の水軍を撃滅することによって本国との連絡路を威嚇した。

そこで倭軍は豊臣秀吉の遺言を口実として逃げて行った。李舜臣は、これを高粱で大破して戦死した。これによって倭乱は終わりを告げた。

7年間にわたる国難を克服することができたのは、李舜臣・権慄・金時敏等名将の優れた指揮力と、亀甲船と、優秀な性能を持った火砲、郭再祐・高敬命・鄭文孚等の義兵將達の活躍と、義兵や官軍で戦った無名の軍卒と農民達の火と燃える愛国心、そして戦場へ直接出て行った婦女子達の労苦が一つに合わさってきた、国民の総力戦であったからである。(P174-177)

先ほど述べたように、日本の教科書の秀吉の朝鮮侵略の理由については「仮道入明」論の域を出ないものであったが、その後の経過についてはどの様に記述しているであろうか。

韓国の教科書はおよそ3ページ半を費やして、義兵の活躍や李舜臣の奮戦ぶりを語っている。しかし日本の教科書では、それらのことがらはわずか2、3行で説明されているに過ぎない。中教出版社版では、「日本軍は、侵略に対する朝鮮の民衆の強い抵抗などで、しだいに苦戦となり」と述べるのみである。日本書籍版の場合は、「秀吉の軍隊の進路と朝鮮義勇軍」という付図が載せられていて、主な

戦場や朝鮮義勇軍（義兵）が活躍した地域を示している。ただし、本文では「しかし、朝鮮の民衆が各地で立ち上がり」と述べるにとどまっている。

中教出版社版では、「朝鮮水軍の大型兵船」という説明を付して亀甲船の図を掲げているが、「船の形が伏した亀に似ているので亀甲船という」と述べるのみで、亀甲船をここでみせる意味がどこにあるのかは何も語られていない。それは、大阪書籍版でも同様で、亀甲船の復元模型の写真にただ「鉄板をはった朝鮮の軍船です」という説明が一行付くだけである。亀甲船という奇異な形をした船は、なるほど生徒の興味を引くには打って付けの材料であるにはちがいないだろう。しかし、どういう意図を持って亀甲船を取り上げたのか本文などでそれとわかるようには書かれていない。

もう一つ挿図について述べておきたいことは、大阪書籍版に「釜山城の戦」と題を付けて、韓国の教科書でも使用している、卞璞描くところの「釜山城戦闘図」（釜山僉使殉節図）の解説についてである。「小西行長の軍が釜山城をせめているようすで、日本軍の鉄砲に対し、朝鮮軍は弓矢で応戦しています」という説明が付されている。日本軍が新兵器の火縄銃を使用し、朝鮮軍が旧式の弓矢で対抗したことは韓国の教科書にも書いてあることであり、それ自体は史実である。しかし、敢えて危惧するところを述べるならば、進んだ兵器を持つ日本兵と遅れた兵器で抵抗する朝鮮兵という説明は、不注意に扱うと、かつての「太閤秀吉の朝鮮征伐」における「加藤清正の虎退治」のような「痛快さ」につながりかねないという点である。韓国の教科書が、日本兵が持っていた鉄砲に触れるのは、祖先達が直面した敵がいかに殫猛かつ強力であったかを強調し、祖国が被った苦難を生徒に理解させようという意図によるのであろう。それならば、日本の教科書がその同じ図を使おうとするなら、われわれは一体何を生徒に伝えようとするべきなのだろうか。韓国側が、理不尽にも攻め込んで来て暴虐の限りを尽くす日本という歴史像を提示しているのであるが、それに対して日本はどの様に答えたらよいのであろうか。なお、一言つけ加えていくと大阪書籍版の教科書は、朝鮮関係の記述は他の教科書に比べると詳しい方で、朝鮮の官民の抗戦についてもやや詳しく書かれている。

秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮に人的・経済的その他広範囲にわたって甚大な被害を与えた。それは、これまでの倭寇によるものとは全く比較にならない程であった。

倭乱の影響 倭乱でわが国が被った、人的・経済的・文化的損失は、想像もできないほど酷いものであった。日本に拉致された同胞達の中には、奴隸として遠く東南アジアにまで売られて行った人もあった。

農地は荒廃し、倭乱前に約150万結程もあった土地が、倭乱直後には約50万結に減少した。

この戦争を通して、我が同胞は民族意識を持つようになり、日本に対する民族感情が長い間晴れなかった。一方、李舜臣と諸義兵将に対する国民の尊敬心は大変なもので、彼らを祭る祠堂が諸処に作られるようになった。

無謀な戦争を引き起こした日本も多くの人命を失い、国民も大きな苦痛を受けさせられ、豊臣政権に対して不平が爆発して、徳川家に政権を握られた。しかし、この戦争で略奪された我が文物は、日本文化の発展に大きな恵みを与えた。

すなわち、拉致した朝鮮性理学者を通して性理学を学び、陶磁器技能工を通してわが国の発達し

た陶磁器工芸が伝わり、日本陶磁器工芸に新たな歴史が開かれた。また、多くの書籍と金属活字を奪って行って多数の書籍を出版し、日本文化の発展に決定的な影響を与えた。

一方、多くの軍勢を動員してわが国を助けた明は、その負担が大きくて国力が衰弱し、不平勢力の反乱が国内各地で起こった。このような時に乗じて、満洲の女真族が明の支配から抜けでるようになった。

このように、倭乱は、東北アジアの歴史に大きな変化をもたらした。(P 177—179)

「倭乱の影響」では、日本に朝鮮の人達が拉致されて行ったことが述べられ、農地の荒廃の状況については具体的に数字を揚げて説明もされている。また、長期にわたる無謀な戦争遂行によって、豊臣政権そのものが倒れたことも述べられている。さらに注目すべきことは、朝鮮から拉致してきた陶工によって日本に新しい陶磁器製造技術が伝わり、略奪してきた活字によって出版事業も行われたことなど、日本に及ぼした文化的な面における恩恵についても触れられていることである。

一方的な被害者意識をむき出しにした記述ではなく、これほど大きな被害を被りながらもなお自国の文化に誇りを持ち、日本に対する文化的優位を全面に押し出している⁽¹⁷⁾。また、秀吉の朝鮮侵略が、東アジアにどのような影響を与えたのかについても忘れずに解説されている。俗な言い方をするなら、戦争は侵略された方は勿論、侵略した側も大きな損害を被ることを免れないと言うことが、控えめながらも押さえられているといえよう⁽¹⁸⁾。

日本の教科書では、侵略者である日本自身の損害についてはほとんど触れるところがない。朝鮮に与えた損害や日本兵の蛮行については

日本軍に従って行くことを命ぜられたひとりの僧は、日本軍の残虐な振る舞いに出くわし、「野も山も焼きはらい、人を切り、人の首をしぼる。そのため、親は子どもをなげき思い、子どもは親をさがしまわるあわれな光景を見た」と日記にしるした⁽¹⁹⁾。

というように、他の教科書よりは詳しく書いてあるものも見られるが、日本自身の損害については「しかし講和が成立しなかったので、秀吉はふたたび戦争をはじめた。こんどは朝鮮・明の連合軍にさんざん苦しめられた」と戦場における不利な情勢だけをごく簡単に述べるにとどまっている。

この様なところで戦争について記述する際、日本側の被害のみを強調することは、そもそも戦争を仕掛けたのは日本の方であって、日本が侵略者であったことを曖昧にしてしまう危険性が大きいので、慎重に記述することが大切である。加害者を、あたかも被害者であったかのように書くことは、厳に慎まなければならないことは言うまでもないことである。戦争による彼我の被害状況を公正に記述することは、戦争というものを生徒に教える上で十分に配慮しておかねばならないことではなかろうか。次のことなどは少し細かすぎるかとも思うが、中教出版社版教科書で「前後7年にわたる朝鮮侵略は、多くの人命を失い、朝鮮の国土をあらして終わった」と言うとき、この「多くの人命」は一体どこの国の「多くの人命」なのか曖昧な表記であると言わざるをえない。

戦争に対する歴史的な評価は、あるいはその時代時代によって変わるものなのかも知れない。しかし、現在は平和憲法の主旨を教育の場で教える時代であるし、今のこの平和な時代が、15年戦争の大きな犠牲と反省の上に成り立っていることを考えるならば、戦前のように征服戦争、領土拡張戦争に

対して、肯定的な評価を下すことはできない。戦争と平和の問題についても機会があるごとに考えて行こうとするなら、近現代史や公民分野の憲法の説明の時だけに限定することはないのではないか。

秀吉の朝鮮侵略によって甚大な被害を受けた韓国では、それを民族の底力を示す教材として活用している。韓国がそうであるなら、侵略をした日本側は、侵略の事実や残虐な行為を覆い隠すのではなく、事実は事実として正面から見据えて、これからの世代を担うことになる子供たちに平和の意味について考えさせる材料として活用していくべきであろう⁽²⁰⁾。

二度にわたる朝鮮侵略は、豊臣秀吉の死によって、日本軍が撤兵した事により終わった。豊臣政権の後を継いだ徳川家康は、朝鮮との平和な国交回復を願った。その結果、朝鮮からは、將軍の代替わりごとに通信使が来日するようになり、日本側は対馬の宗氏を朝鮮との外交担当とした。そして釜山には倭館が設置され、宗氏の家臣が常駐して外交事務や貿易の事に当たった。鎖国政策をとっていた徳川政権下においては、朝鮮は唯一正式の国交を持っていた国であったのである。

通信使 倭乱によって、日本との国交が断絶された。徳川家康は、豊臣政権を倒した後、江戸（東京）に幕府を設置して日本の統治権を掌握したのに次いで、わが国との国交回復を熱望した。彼は、拉致されて行った人々を送り返すなど、誠意を尽くしつつ、再び交隣外交政策をとるよう要請してきた。

わが国でも、隣国と交隣をしようという国初からの原則を生かして、徳川政権との交隣政策を再開した。

そして、交隣政策の精神を生かした己酉条約を結び、日本の要請によって通信使を派遣し、日本の船が釜山港を出入りして交易をする事ができる機会を与えてやった。

通信使は約500名で編成されていたが、日本の丁寧な接待を受けて往来した。通信使の往来を通して政治的関係が実現し、両国間の交流も活発になった。わが国の使臣が日本に上陸して江戸へ至る途中に、日本の学者、芸術家などが訪ねてきて、われわれの文物を学ぼうと努力した。

日本との貿易も行われた。わが国からは毎年多くの綿布が日本へ出て行き、日本からは銅が入ってきた。煙草、唐辛子、トマト、薩摩芋などもこの貿易を通してわが国へ伝えられた。(P178-P180)

豊臣秀吉による朝鮮侵略の後、徳川家康によって日朝間の国交が再開され、通信使が派遣され、貿易が再開されるなど、久々に両国の関係は正式かつ平和的なものになったのである。韓国の教科書の中の日本関係の記述においても、はじめて日本に対していささかなりとも好意的な記述がみられる事となった。教科書の挿図も、「ソンウン大使が日本人に書いて与えた詩文」の写真や、「日本での朝鮮通信使の行列 18世紀頃に日本に行った朝鮮通信使達が、日本人たちの護衛を受けて偉容を誇る図である」と説明のある図が用いられている。

朝鮮通信使の待遇をめぐって一時的にもめた事があるにはあったが、徳川政権下においては、日本と朝鮮との関係はおおむね良好であったと言える。そしてこの間に、雨森芳洲のような朝鮮語をよくする人物が現れて、朝鮮との交渉にあたり、ただ外交事務だけではなくして学問的な面でも交流を深める事もあったのである⁽²¹⁾。

日本の教科書では、中教出版社のものが「朝鮮・琉球・北海道」という見出しのもとで「朝鮮とは、

家康の時代に国交が回復し、外交や貿易には対馬藩の宗氏があたった。そして、将軍の変わるごとに使節がきて、朝鮮や中国の文物を伝えた」と述べているが、他社のものも、通信使という名称を明記するぐらいで、内容にそう大きな違いは認められない。そして、それ以降のことについては韓国の教科書が近代の初めに至るまで日本に関しては何等触れる事がないのと同じく、日本の教科書も朝鮮に対してはまったく関心を払わないのである。江戸時代の日本人の中には、朝鮮人に対して謂れのない優越感をもったり差別意識を露にする者があったようであるが⁽²²⁾、概ね両国は対等かつ平和的外交関係を幕末に至るまで維持したのであった。しかしそれにしても、教科書の記述はお互いにそっけないように見える。あるいは特記すべき事件がないほどに平和的なものであったという事なのであろうか。教科書の記述の中では、両国外交史上希にみる平穏無事な時代のことは、事件が起こった年号を暗記させ人名や地名を暗記させる入学試験の問題にはなりえないかも知れないが、歴史教育の場ではむしろこちらの方が大事にされなければならないと考える。

壬辰倭乱・丁酉再乱の後、満洲では明が衰弱した隙に乗じて女真族の勢いが盛んになり、1616年にはヌルハチが女真族を統一して後金を建てた。朝鮮は、壬辰・丁酉両倭乱の傷が癒えぬうちに、1627・1636年の二度にわたっていわゆる丁卯・丙子の胡乱を受けて、金から清へと国号を変えた女真人に屈伏させられたのである。

朝鮮時代の16世紀末から17世紀前半にかけてのこの時期は、まさに国難続きの時代であった。「外侵の克服」の節は12ページあるが、その中倭乱についての記述は6ページ余り、通信使に関する記述が1ページ半、そして胡乱と羅禅征伐(清とロシアが黒竜江付近で対立した時、清の要請で朝鮮が鳥銃隊を派遣した事件)に約2ページが費やされている。したがって、「外侵」とは言うもののその内容はほとんど「倭乱」で占められているという事ができる。最後に、この「外侵の克服」の節の「学習整理」を見ておきたい。

〔学習整理〕

1. 朝鮮は、国際平和を維持して国家の実利を得るために、交隣政策と事大外交を展開した。
2. 両班社会の分裂と対立によって起こった政治的混乱は、外勢に侵略の機会を与える事となり、外侵に当面することになった。
3. 倭乱が起こると、各地で蜂起した義兵、李舜臣が率いた水軍、再編された官軍の戦闘等にやってきた国民が展開した救国抗戦によってとうとうこれを克服した。
4. 倭乱に続いた、胡乱によって北方民族に対する警戒心は長らく存在したが、清が中国大陆を支配するようになると、韓末まで国交が維持された。(P183)

小 結

以上、高麗時代と朝鮮時代前半の韓国史の中で、日本の事がどのように記述されているかを概観した。この時期においては、倭寇と壬辰倭乱および丁酉再乱に記述の重点が置かれていて、貿易・外交関係等については全といてよいほど関心が払われていない事が知られる。あえて非難がましい言い方をすると、少々いびつな記述であると言わざるをえない。

しかし、原始古代の記述を検討した時にも述べたように、日本の朝鮮侵略の側面が強調される根本的要因は近代以降の日本と朝鮮との不幸な歴史的関係にあるのであって、戦後成立した大韓民国も、近代以降の両国の歴史を重要視している事が明らかに知られるのである。隣国の人々のこのような日本を見る目を、日本ではどう受けとめれば良いのであろうか。少なくとも、現行の日本の教科書の中では、このような問題意識は希薄であるように見受けられる。

注

- (1) 原文では「モンゴル」ではなく、漢字「蒙古」の音読み「モンゴ」を用いている。
- (2) 高麗の元に対する抵抗、特に三別抄の勇戦が結果的には元の日本遠征を遅らせたことについては、池内宏「高麗の三別抄について一附、三別抄の反乱」(『満鮮史研究』中世第三冊所収、吉川弘文館、1963)や旗田巍『元寇—蒙古帝国の内部事情』(中公新書、1965)などで述べられている。また、彼らの行動で、日本にとって有利な条件となった具体的な例については、村井章介『アジアの中の日本』第二部「中世外交の多様な重層」の「IV 高麗・三別抄の叛乱と蒙古襲来前夜の日本」(校倉書房、1988)に史料とともに紹介されている。
- (3) 『中学校社会 歴史分野』P86(日本書籍発行 1987)
- (4) 『中学校社会 歴史分野』P77, 78(大阪書籍発行 1987)
- (5) 関斗基著『日本の歴史』(第八版 知識産業社 1987 SEOUL)
- (6) 倭寇と呼ばれた者たちの中に、中国人やポルトガル人などが混じっていた事は、各種の概説書などによく書かれているが、日本語を話し日本人の衣服を着る「倭寇」の中に高麗、朝鮮人が多くいたらしい事が最近指摘されるようになってきた。田中健夫「倭寇と東アジア通行圏」(『日本の社会史』1・列島内外の交通と国家、岩波書店、1987. 1)、高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流—濟州島を中心として—」(『名古屋大学文学部研究論集』〈史学〉33, 1987. 3)参照。
- (7) 「韓国の国史科教科書にみる日本の歴史 (2)」(聖徳学園岐阜教育大学紀要第十七集 P14)
- (8) 教科書には「倭寇」と書いてあるが、大王岩の伝説を記す『三国遺事』には「文武王、倭兵を鎮めんと欲す」とあって、「倭寇」という語は用いられていない。また、『三国史記』では、「倭人、東辺を犯す」「倭人、木出島を侵す」「倭兵、大いに至る」と記されていて、やはり「倭寇」という語はみられない。前近代において、日本による侵略を韓国語で一般的に「倭寇」とは言い習わしているのかも知れないが、史料にも現れる歴史学的用語としての「倭寇」と紛らわしい表現は避けるべきではなかろうか。ちなみに卓上版の韓韓辞典である『東亜新国語辞典』(李基文監修、東亜国語辞典研究会編)の倭寇の項を見ると、「昔の『日本の海賊』を言った言葉」と解説されている。
- (9) 注(4)書 P84
- (10) 注(3)書 P92
- (11) 『日本の歩みと世界』(中教出版 1987) P60
- (12) 「参天台五台山記」に「高麗船人来、告知日本語」と見える。
- (13) 注(3)書 P93
- (14) 注(10)書 P82
- (15) 注(10)書
- (16) 注(4)書
- (17) 一方的な被害者意識を持つことなく、自国の文化に対する誇りを忘れぬよう教育的配慮がなされているわけである。この点については、当該箇所における記述に対しては好感を覚えるし、むしろわが国の教科書ではそのような事柄に対してほとんど何も触れていないことを問題にすべきであるとも考えるが、このような文化的優越感は、時として中華思想的発想を招く恐れがあることも事実である。前近代において、韓国の教科書が一貫して日本を文化的に低位にある国と見ていることについては以前にもして記しておいたところである。日本についてはあるいはその通りであるかも知れないが、北方の狩猟民族に対する記述の仕方には、正直に言って賛成しかねるところがある。わが国の歴史教育の場においても、自国の文化の優秀さや独自性を述べるときには独善的にならぬよう、また不当に他民族の文化を軽視しないよう配慮せねばならないと思う。

- (18) わが国の教科書で、戦争をどのように教えていくべきかと言うことは、いまだに合意が成立していないと言うのが現状ではなかろうか。教科書において、戦争に関する記述、特に近代以降の戦争については、それをどのように記述するかという時点で、歴史の真実をないがしろにした政治的立場からの非難の応酬が目につくように思われる。元寇の場合などもそのような視点から記述してみるとどんなものになるだろうか。
- (19) 注(3)書 P124
- (20) 過日、ある研究会で韓国の国史科教科書について報告する機会があった。会が終わってから、参加者のひとり(専門の歴史研究者ではない)が、「中学校などで本当のことを教えるとえらいことになりますね。本当のことを教えるべきではありませんね」と発言した。過去における日本人の芳しくない事柄を教えると、国家に対する敬愛の念や忠誠心、自国の歴史に対する誇りなどが失われてしまうからと言うのがその理由のようであった。歴史教育の場では、歴史の真実をすべて教えなければならないものではないのかもしれない。いわゆる「教育的配慮」が必要な場合もあるかも知れない。百歩譲って仮にそうであったとしても、それは児童なり生徒の発達段階や理解力に応じて、何をどの程度教えるのか、という意味での「教育的配慮」が必要なのであって、史実であっても都合の悪いことは隠したり、あるいは史実を歪曲するためにするものであってはならないだろう。
- (21) 上垣外憲『雨森芳洲 元禄享保の国際人』(中公新書945, 1989, 10)
- (22) 注(21)書には、当時朝鮮の倭館に駐在していた対馬宗氏家中の侍の中に、豊臣秀吉の朝鮮侵略以来朝鮮人が日本人を恐れているのにつけこんで、朝鮮人に対して高飛車な態度で臨む者がいたり、偏見を持つ者があった事が紹介されている。
- (付記) 小稿は研究題目「韓国の国史教科書における日本史記述の検討」に対して与えられた、1989年度学内研究助成金による研究成果の一部である。